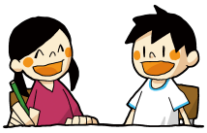
相ノ木っ子だより

令和４年度
１月号
上市町立
相ノ木小学校

言葉は心の足音



「自分が発する言葉をもっと大切にしていきましょう」

誰もが飛躍の年になるであろう、卯年の２０２３年が幕を開けました。久しぶりに相ノ木っ子たちと顔を合わせましたが、一人一人の挨拶も元気で、目に輝きを湛えた子供たちの姿がありました。「気持ちも新たに、がんばるぞ」といった思いが見えてくるようで、本当にうれしく思います。始業式でわたしは、「今年の暖冬のような穏やかな心で３学期を過ごし、ゆとりある心もちでいろいろなことに気を配る相ノ木っ子になりましょう」と話し、自分の心を映し出す言葉を大切にするよう、冒頭の言葉を子供たちに投げかけました。

相ノ木っ子たちは、素直で正直です。あまり忖度なく人と付き合える子供たちです。そんな子供らしいよさをもち合わせているわけですが、相手を傷つけてしまったり、自分が嫌な思いをしたりする場面が時々あります。これは、パッと口から発せられる言葉がきっかけになって起きていることが多いように感じます。感性というものは大事ですし、それが言葉となって出てくることによって素敵な表現が生まれることもあるでしょう。しかし、言葉は自分の意思の表れであるとともに、コミュニケーションツールでもありますから、当然相手というものが存在します。ですので、自分が発する言葉には十分気を付ける必要があります。

僧侶であり、作庭家でもある枡野俊明さんは、次のように言っています。

一度口にした言葉は決して元に戻らない

言霊と言われるように、言葉には何かしら大きな力を秘めているものです。発してしまった以上は、取り消すこと、引っ込めることができないことを忘れず、自分の言葉に責任をもたなければなりません。

言葉は薬にもなれば、毒にもなる

これは、精神科医で随筆家でもあった斎藤茂太氏の言葉です。言葉の使い方によって、その効果は大きな差を生みます。言葉で相手を傷つけてしまうことは、自ずと自分をも損なっていることにもなります。相手の人がほわっとする、そして使った自分も気持ちがほわほわする、そんな心の薬になるような「あったか言葉」を常々使うようにしたいものです。

また、臨済宗の僧侶であった松原泰道氏は、次のように言っています。

言葉は心の足音である

素敵な表現ですね。言葉には、使う人の心の表れ、気持ちの有り様が滲んでくるものなんですね。どれだけ丁寧な言葉遣いであったとしても、冷たい心、親愛のない気持ちから発せられた言葉であったなら、受け取る側の心にぐさっと刺さることでしょう。相手の気持ちを察する心づかいや相手に対する優しい心もちから出てくる言葉があってこそ、互いの素敵なコミュニケーションが図られていくのです。

心から言った言葉は言葉以上のものを伝える

これは、元サッカー日本代表監督の岡田武史さんの言葉です。人前で話す時にわたしは、話す内容を考え原稿にしますが、要点を頭に入れて人の目を見て話すようにしています。それでも、考えた文章を正確に話そうとしている時は、自分の思いを十分に伝えきれていない気がします。やはり相手の表情等を確認しながら、自分の心と相談して言葉を紡ぎ出している方が、自分の気持ちをしっかりと伝えられているように感じます。そういった言葉の方が、相手に言葉以上のものを伝えてくれるものなのでしょうし、わたしの心の足音が聞こえているのかもしれません。

相ノ木っ子のみんな、冷たい心の足音ではなく、温かな心の足音が聞こえてくる言葉をたくさん発していきましょうね。

相ノ木っ子の魂と精神の継承

「校長先生、雪かきしたらいいですか？」

積雪等でたいへんな地域もありますが、富山県は暖冬の様相で、積雪もなく穏やかな年末年始を過ごすことができました。例年でしたら、スノトレを履いて雪や車を気にしながら大きな道を散歩していたのですが、今年はズックで田んぼ道を軽やかに歩くわたしの冬休みでした。とても雪国とは言えない今年の富山の天候は、異常なのか、天の恵なのかよく分かりませんが、たいへん過ごしやすく、このまま穏やかな冬が続いてくれたら、わたしたちが日々生活する上でうれしい限りです。ただ、ちょっと困ったこともあるのです。

２学期末、６年生の子が朝登校してきてわたしに話しかけてきたのが、冒頭の言葉です。その日は、前夜に降雪があり、うっすらと雪が積もっていましたが、すぐに溶けそうなぐらいのものでした。わたしは、「ありがとう。でも、今日大丈夫そうだからいいよ。年が明けたらまた降ってくるから、その時頼むね」と答えたのですが、その子はちょっと残念そうな表情を浮かべました。

朝の除雪活動は、もちろん我々教員も行っていますが、６年生も自主的にやってくれます。朝登校したら、６年生たちが次々と出てきて雪かきに励んでいます。特に学校で決めた役割ではないのですが、歴代の６年生たちが続けてきたもので、一種の伝統になっています。また、そんな６年生の活躍を毎年見て、下級生たちは、「わたしも６年生になったら…」といった憧れや意欲をもつようにもなるんです。

作家の森巣博さんは、次のように言っています。

残るものなら、ことさら守れと言わなくとも、歴史の試練に耐えて必ず残る。

６年生にとって誇れる仕事であり、下級生にとっては将来の目標となっていることが、除雪活動が伝統となって続いてきた理由だと思います。きっとそういったよい伝統だからこそ、自然と、自主的に長い間引き継がれ、残ってきたことでしょう。ですから、６年生にはどんどんがんばって活躍してほしいですし、最高学年としての見せ場にしてほしいのです。ところが、昨年１２月にまとまった雪が積もった日の１度しか除雪を行えていません。ですから、たまには雪が積もるぐらいに降ってもらって、６年生たちのがんばる姿をもっともっと見せてもらいたいです。

伝統とは形を継承することを言わず、その魂を、その精神を継承することを言う。

これは、柔道家の嘉納治五郎氏の言葉です。６年生たちの除雪に取り組む姿を見ていると、この言葉がぴったり当てはまるような気がします。よいものをどんどんやっていこう、下級生に残していこうといった思いがしっかりと継承されています。とは言え、やはりわたしたちの生活が少し不便になってもよいから、相ノ木っ子たちのため、よい伝統のため、学校周辺にも雪が降って積もってほしいですね。そう願わずにはいられません。

行事予定（１月中旬～２月中旬）

１月	１６日（月）	水泳学習(1・2年)	２月	２日（木）	上市中学校体験入学(6年)
		なわとび検定週間(～1/20)		５日（日）	相ノ木校区バドミントン大会
	１７日（火）	プログラミング学習(5・6年)		１０日（金）	学習参観・学級懇談会
	１９日（木）	水泳学習(5・6年)			親子下校 15:40
	２０日（金）	水泳学習(3・4年)		１４日（火）	特別支援学級合同学習会
	２４日（火）	プログラミング学習(5・6年)			英語教室(2年)
	２６日（木）	スキー教室(3～6年)			
	２７日（金）	プログラミング学習(6年)			